

メッセージアウトライン

ルカの福音書 1:1～25「ザカリヤのとまどい」

[1-4]「私たちの間で成し遂げられた事柄については、初めからの目撃者で、みことばに仕える者となった人たちが私たちに伝えたとおりのことを、多くの人がまとめて書き上げようとすでに試みています。私もすべてのことを初めから綿密に調べていますから、尊敬するテオフィロ様、あなたのために、順序立てて書いて差し上げるのがよいと思います。それによって、すでにお受けになった教えが確かであることを、あなたによく分かっていただきたいと思います」

これはルカの福音書の序文である。ルカはこの福音書に書かれていることが歴史的事実であり、イエス・キリストが神のもとから来られた真の救い主であることであることを教えようとしている。

ルカはパウロの同労者で、医者であり(コロサイ 4:14)、使徒 16:10 以来、聖書に登場して来て、常にパウロの伝道旅行に同行して彼を助けている。伝承では彼はシリアのアンテオケ生まれとされている。

「初めからの目撃者で、みことばに仕える者となった人たち」(1)とは、ペテロやヨハネを始めとするイエス・キリストの弟子たちのこと。彼らは後に使徒と呼ばれている。彼らが伝えたとおりのことを、ルカがローマの高官テオフィロに順序を立てて書くというかたちで始まる。テオフィロは求道者または信仰に入って間もない人物であったと思われる。

テオフィロは「神の友」という名であるが、当時としては一般的な名前であった。

「私もすべてのことを初めから綿密に調べていますから」(2)…彼の手もとには多くの資料が集められていたと考えられる。多くの人々がそれをまとめて書き上げようと試みていたが、ルカはそれを初めから順序立てて書くことができた。これはテオフィロ個人に当てた形となっているが、テオフィロはルカの直筆の文書を受けて、それを広く世界に知らせることができる立場にあったと思われる。それゆえ読者はテオフィロ一人ではなく、多くの異邦人信者、また求道者でもあったであろう。

ルカはこの文書の内容が確かであることをよく分からせる(4)ために書いたのである。彼はこの他に続編ともいうべき「使徒の働き」をも執筆している。

[5]「ユダヤの王ヘロデの時代に、アビヤの組でザカリヤという名の祭司がいた。彼の妻はアロンの子孫で、名をエリサベツといった」

「ユダヤ」…イスラエルの南部。「ヘロデ」…時のローマ帝国政府からユダヤの王に任ぜられ、エルサレムの神殿再建に着手するなどして、ヘロデ大王と呼ばれたが彼は純粋なユダヤ人ではなくエドム人の家系であった。エドム人はユダヤ人(イスラエル民族)の先祖で

あるイスラエル(ヤコブ)の兄のエサウを先祖とする民族で歴史的にはイスラエル民族と確執があった。→創世記 25:20~26

時はヘロデ王がユダヤを治めている時代。彼は非常に猜疑心の強い人物で、自分の地位を脅かすと思った者は自分の子どもでも容赦なく殺し、非常に恐れられた。(ヘロデの治世は BC37-AD4 で 70 歳で死亡している)

「アビヤの組」…エルサレムの神殿で奉仕する祭司二十四組のうちの第八組→ I 歴代誌 24:10)

「ザカリヤ」…「主は覚えておられた」の意。「エリサベツ」…「わが神は誓い」の意。「アロンの子孫」…名門である祭司の家系。

[6-7]「二人とも神の前に正しい人で、主のすべての命令と掟を落ち度なく行っていた。しかし、彼らには子がいなかった。エリサベツが不妊だったからである。また、二人ともすでに年をとっていた」

この二人はもう年をとっており、しかも彼女は不妊の女性で子どもがなかった。二人の長年の祈りの課題は子どもが与えられることであつたであろう。

[8-10]「さてザカリヤは、自分の組が当番で、神の前で祭司の務めをしていたとき、祭司職の慣習によってくじを引いたところ、主の神殿に入って香をたくことになった。彼が香をたく間、外では大勢の民がみな祈っていた」

朝と夕に神殿で香をたく務めは、組の祭司の間でくじを引いて決めていた。これは一生に一度しか担当できない光栄な務めであつた。(香から上る煙は祈りの象徴である)その間、大勢の民はみな外で祈っており、香をたいた祭司は最後に聖所から出て来て民数記 6:24~26 の祝福をもって民を祝福するのが常であつた。

[11]「すると、主の使いが彼に現れて、香の祭壇の右に立った」

この主の使いの名は 19 節を見るとガブリエルという名であることが分かる。ガブリエルは旧約のダニエル書 8:15 節以下にも登場している。ダニエルは BC6 世紀の預言者。

[12]「これを見たザカリヤは取り乱し、恐怖に襲われた」

旧約の最後の預言者マラキが活躍した BC400 年頃以降、この祭司ザカリヤの時代に至るまでの約 400 年間イスラエルには神からの何のこともなく、預言者も起こされなかつた。しかし今、その 400 年の沈黙を破り、神からの働きかけがイスラエルに対してなされたのである。

ザカリヤは御使いのことは旧約聖書を通して知っていたであろうが、実際に目で見ただけで初めてであつた。人間の姿をした人間ならぬ者が目の前に突然現れた。それで彼は非常に恐れたのである。

[13-14]「御使いは彼に言った。『恐れることはありません、ザカリヤ。あなたの願いが聞き入れられたのです。あなたの妻エリサベツは、あなたに男の子を産みます。その名をヨハ

ネとつけなさい。その子はあなたにとって、あふれるばかりの喜びとなり、多くの人もその誕生を喜びます。』」

年をとってしまった今日に至るまで、ザカリヤの願いは子どもが与えられることであった。彼は何十年もこのことを祈ってきたのであろう。しかし、その願いはなかなか聞かれず、彼も妻エリサベツも老境に入っていた。いつしか子どもが与えられるようにとの熱心な祈りはひそやかなものとなり、長かった祈りは短いものとなっていたかもしれない。彼の願いは願いのままで終わり、このまま地上の人生を閉じなければならぬのか。そのような時に、突然、御使いが現れて、彼の祈りが聞かれたこと、彼の妻が男の子を産むこと、その名をヨハネとつけるようにと、性別と名前まで指定されたのである。

「ヨハネ」とは「主はいつくしみ深い」という意味。

主はザカリヤの祈りを忘れてはおられず、彼と妻エリサベツを顧みてくださった。まさに主はいつくしみ深いお方であり、彼を喜び楽しませてくださるお方なのである。人間的にはもう遅い、手遅れだと思われるような時が実は神の時であるということがある。人間の側でいろいろ手を尽くして努力しても、何の効果も現れない、そして人間的な試みがすべて取り去られた後に、神の働きが始まる。このようなことはしばしば起こる。→アブラハムの子イサク誕生(創世記 17, 21 章)、ベタニア村のラザロのいやし(ヨハネ 11 章)。人の願う時と神の計画されている時とはしばしば違うことがある。しかし、そのような時こそ最も神の力、神の栄光が現わされる時なのである。

[15-17]『その子は主の御前に大いなる者となるからです。彼はぶどう酒や強い酒を決して飲まず、まだ母の胎にいるときから聖霊に満たされ、イスラエルの子らの多くを、彼らの神である主に立ち返らせます。彼はエリヤの霊と力で、主に先立って歩みます。父たちの心を子どもたちに向けさせ、不従順な者たちを義人の思いに立ち返らせて、主のために、整えられた民を用意します。』」

「ぶどう酒や強い酒を飲まず」とは民数記 6 章に書かれている「ナジル人」と関係があり、これは特別な誓いを立てて、自らを神のために聖め分かつ人のことを指す。ぶどう酒や強い酒を飲まず、髪の毛は伸ばしたままにする。死体に近づいたり触れたりして宗教的に汚れた者とならないなどの規定がある。ヨハネはもう誕生の時から神のために聖め分かたれたナジル人となると言われる。そして彼は母の胎内にある時から聖霊に満たされ、エリヤの霊と力をもって民を主のために整える働きをするという。

「エリヤ」…BC9世紀にイスラエルを偶像礼拝から立ち返らせるために活躍した預言者。「エリヤの霊と力で」とはエリヤが当時のイスラエルの民に偶像礼拝の罪を激しく非難し、悔い改めを強く迫ったように、ヨハネも霊的に、そのエリヤと同じ働きをするということ。マラキ書 4:5-6 には「見よ。わたしは、主の大いなる恐るべき日が来る前に、預言者エリヤをあなたがたに遣わす。彼は、父の心を子に向けさせ、子の心をその父に向けさせる。そ

れは、わたしが来て、この地を聖絶の物として打ち滅ぼすことのないようにするためである」と預言されている。

この預言が約 400 年の時を経て、このヨハネにおいて成就するのである。しかし、ヨハネは文字どおりのエリヤその人というのではなく、「エリヤの霊と力で」と言われているように、エリヤが当時のイスラエルの人々の偶像礼拝の罪を激しく責め、悔い改めを迫ったようにヨハネも霊的にそのエリヤと同じ働きをするという意味である。

[18-20]「ザカリヤは御使いに言った。『私はそのようなことを、何によって知ることができるでしょうか。この私は年寄りですし、妻ももう年をとっています。』御使いは彼に答えた。『この私は神の前に立つガブリエルです。あなたに話をし、この良い知らせを伝えるために遣わされたのです。見なさい。これらのことが起こる日まで、あなたは口がきけなくなり、話せなくなります。その時が来れば実現する私のことばを、あなたが信じなかったからです。』」

ザカリヤは自分の年齢、妻の年齢、そして妻エリサベツが不妊であること。こういった現実や現状を通してものを見た。つまり、人間的な理屈や常識で考えたのである。たしかに普通の人ならそうしたであろう。しかし、彼は長年、神に仕える祭司ではなかったか。聖書もよく知っており、彼らの先祖アブラハムの妻サラが九十歳という高齢であったのに神の約束により、イサクを産んだことを知っていたはずである。ザカリヤの場合も、今、御使いが彼の前に現れて、彼の妻エリサベツが男の子を産むとの約束を告げている。しかし、ザカリヤはそのことを素直に信じられずに、「私はそのようなことを、何によって知ることができるでしょうか」と、とまどい疑って、しるしを求めたのである。

しかし、見ずに信じる者は幸い。しるしがなくても信じる者は幸いなのである。→ヨハネ 20:29、ヘブル 11:1

ザカリヤは信仰を働かせなかったのであろう。毎日の安定した、しかし、それゆえに信仰を働かせ、必死で神に寄り頼むということをしなくても、日々を大過なく過ごしていけるという環境に慣れてしまうと、私たちもザカリヤと同じような生き方になってしまうかもしれない。ザカリヤは不信仰の結果、口がきけなくなってしまった。この状態はヨハネが生まれるまで続くことになる。

[21-25]「民はザカリヤを待っていたが、神殿で手間取っているので、不思議に思っていた。やがて彼は出て来たが、彼らに話をするができなかった。それで、彼が神殿で幻を見たことが分かった。ザカリヤは彼らに合図をするだけで、口がきけないままであった。やがて務めの期間が終わり、彼は自分の家に帰った。

しばらくして、妻エリサベツは身ごもった。そして、『主は今このようにして私に目を留め、人々の間から私の恥を取り除いてくださいました』と言い、五カ月の間、安静にしていた」

御使いのことばのとおり確かにエリサベツはみごもった。彼女はこの出来事に対し、「主は……人々の間から私の恥を取り除いてくださいました」と喜びのうちに告白した。彼女は

長年の間、子どもが生まれないことで周りからいろいろなことを言われ、傷つき、苦しみ、悲しんできたのであろう。それゆえに、今、子どもが与えられて彼女の胎内で順調に育っているのを見て、大きな喜びがあったことだろう。

この妊娠はもちろん夫ザカリヤとの間の正常な夫婦関係による妊娠である。しかし、そこに神の恵みによる超自然的な力が働いているのである。

このザカリヤとエリサベツの間に生まれるヨハネが、やがてこの世に来られる救い主イエス・キリストのために道ぞなえをする人になるのである。

ザカリヤは祭司として長年、神に仕え、神を礼拝しているのに、いつの間にかこの世の常識や現実だけを見て物事を判断して、素直に神のみことば、神の約束を信じようとしなかった。彼の姿に私たちの姿が重なるということはないだろうか。信仰を持っている。神を礼拝している。毎週教会に来ていると言いながら、いつの間にか自分の判断や経験を優先して神を常識の世界に閉じ込めてしまっているということはないだろうか。

不信仰は神の働く機会をなくしてしまう。→マタイ 13:58

私たちは今日の個所から教訓を学んで、素直に語られたみことば、聖書のことばを自分のものとして、信仰をもって従い、この世に祝福をもたらす神の通りよき管となっていきたい。そのようにして主の救いの働きのために用いられていく時、私たち自身も祝福されるのである。

→ヘブル 11:1, 6